

Āyāraṅga-sutta におけるテキストの伝承について

——ジャイナ教の聖典成立に関する若干の考察——

渡 辺 研 二

I. はじめに：

一般に、我が国では、ジャイナ教の聖典は、現在の白衣派の聖典が古い伝承を有し、様式や形態も安定したものであるとの認識があるようである。しかしながら、ジャイナ教研究の先駆者 Ernst Leumann がすでに気づいていたように、また近年、本邦の奥田清明博士が裸形派の聖典 Mūlācāra の研究で明らかにされたように、ジャイナ教聖典の本文伝承にはまだまだ未知の部分があり、聖典のすがたや読みに研究の課題が残っている。近年ジャイナ教文献のの研究は進展を示し、内容の深さを増してきた (Nalini Balbir, “Āvaśyaka-Studien I”, *Alt-und Neu-Indische Studien* 45, Hamburg 1993.)。そのような研究に刺激されて、ここでは、ジャイナ教聖典のなかでも最古の聖典とみなされている *Āyāraṅga-sutta* (*Āyār.*) の第 1 篇 (*Suyakkhandha*) の現存テキストの伝承について、ジャイナ教の聖典成立史に興味を持つものから一つの問題提起を行いたい。

II. 問題の所在：

筆者は、今までに現在のジャイナ教の古い聖典の伝承に揺れのあることを見だし、その文献上の証拠を現在のジャイナ教文献の中に発見し、次のような研究を発表してきた。

II-1. 現存ジャイナ教白衣派の聖典のありようについて、祖師マハーヴィーラの伝記の伝承を例にとりて、かつて筆者は、次のような指摘を行った。

「マハーヴィーラの伝記は、まとまったものとしては、*Āyāraṅga-sutta* 第 2 篇第 3Cūlā の Bhāvaṇā 章のものと、*Kalpa-sūtra* のいわゆる Jinacariya の部分がよく知られている。今までの定説として、H. ヤコービやヴィンテルニッツなどの学者たちは、この Bhāvaṇā 章のマハーヴィーラ伝が *Kalpa-sūtra* に引用され、部分的にそっくり引かれているとし、*Kalpa-sūtra* のマハーヴィーラ伝が新しく、素材を *Āyāraṅga*

Bhāvaṇā 章に求めているように考えている。これが近代の学者たちの見解であった。しかし、実際この Bhāvaṇā の、他聖典における引用や古注釈を調べてみると、引用された本文が、現存の Bhāvaṇā 章の本文ではなく、現存の Kalpa-sūtra のなかの Jīṇacariya とよばれるマハーヴィーラ伝のなかに存在することが判明した。つまり、現存の本文に伝承上の動揺が見られ、現存の本文と異なったものが、ある時期まで流通していたことが判明した。したがって、マハーヴィーラ伝の新古、貸借の關係に再考を促す必要が生じたと考えられる。」

cf. 渡辺研二「*Bhāvaṇā 3rd Cūḷā of the Āyāraṅga-sutta II* について」印度学仏教学研究第 36 巻第 2 号 昭和 63 年 3 月 pp. (35)-(42). 渡辺研二「*Ācārāṅga-sutta Bhāvaṇā* 章異本考」——Yāpaniya 派の伝承から——印度学仏教学研究 第 43 巻第 2 号 平成 7 年 3 月 pp. (69)-(74). Kenji Watanabe: Notes on the “*Bhāvaṇā*” 3rd Cūḷā of the *Āyāraṅga-sutta II* (= Jain Studies in Honour of Jozef Deleu, Tokyo1993). 渡辺研二「マハーヴィーラ伝記の伝承について」『ジャイナ教研究』創刊号 (ジャイナ教研究会: 会長 宇野惇 大谷大学長崎研究室発行) 1995 年

II-2. このジャイナ教白衣派の第 1 アンガの Āyāraṅga-sutta の第 2 篇 (Cūḷā) にあるマハーヴィーラの伝記の部分につづく、教理の解説部分である bhāvaṇā の説明の箇所、つまりジャイナ教にとって最重要な教義である五大誓 (panca Mahavvayāim) の各々に 5 つの bhāvaṇā が説かれる部分については、少なくとも 2 つの異なった伝承が見いだされた。一例を挙げれば、Āyār. Cuṇṇi の依用した “Bhāvaṇā” の本文の最後には 5 つの偈が附属しているが、現存 Āyāraṅga-sutta の本文にも他の現存アーガマの当該箇所にも 5 つの偈は付いていない。ただし Āvassa Cuṇṇi の当該箇所には大変よく姿の似た本文が伝えられていることが判明した。cf. 渡辺研二「*Bhāvaṇā 3rd Cūḷā of the Āyāraṅga-sutta II* について」印度学仏教学研究第 36 巻第 2 号 昭和 63 年 3 月 pp. (35)-(42).

II-3. また、さらに白衣派の Mūla-sutta の第 2 番目に位置する Uttarajjhāyā (= Utt.) の第 2 章の 12 詩節と 13 詩節におかれている詩節の本文が、はたしてこの聖典を伝持してきたジャイナ教白衣派が主張するように、最後の祖師であるマハーヴィーラの言葉に由来するものでありうるかどうかなという問題を扱った。周知のごとく、この Utt. は、原始ジャイナ教を探るうえで極めてよく引用される重要な聖典である。このジャイナ教白衣派の聖典の伝承を、「裸形」という観点から、聖典の記述

を解説し、特異な伝承をもつジャイナ教 Yāpaniya 派の Aparājita が、現存の Utt. 2 章の 12 詩節と 13-詩節部分に相当すると考えられる箇所を “parisahasūtresu” (parisaha スートラのなかで) と「parisaha 試練に関する経」の存在を暗示する形で śloka 詩節をもって引用していることを見だして、その詩節の内容が、明確に「着衣」(sa-cela) を非難し、「裸体」(a-cela)こそジナの本来の姿であると述べていることを読み取った。そして、「無衣の試練」acela-parisaha という parisaha の内容の説明としては、現存する白衣派の伝承する Utt. 2 章 12, 13 詩節と際立った対照をなしており、後者の方が、いうまでもなく裸形派と白衣派が一致して伝えているマハーヴィーラの主張である「裸形」(a-cela) に合致している。しかも Yāpaniya 派の Aparājita は自らの意見を述べるために Parisaha (試練) に関する sūtra 群の中から、あるいは Parisahasūtra と名付けられたジャイナ教の経典からか、この śloka の詩節を引用してきたのである。しかも、その文節は、現在の白衣派の伝持した「無衣の試練」(a-cela-parisaha) に充てられている Utt. 2 章 12, 13 詩節の本文よりも、内容的にマハーヴィーラの主張により即したものであった。ここでは非白衣派に属するジャイナ教聖典のより古い資料ないし素材の存在が予想されるのである。あるいは現存聖典以前の聖典 (prēcanonique) の存在が考えられるのである。cf. 渡辺研二「無衣の試練 (acela-parisaha) に関する二つの異なった伝承」『ジャイナ教研究』第 4 号 (ジャイナ研究会: 会長 宇野惇 大谷大学長崎研究室発行) 1998 年

III. Yāpaniya 派の伝承からみた Āyāraṅga-sutta

空衣派の Śivārya によって纏められた Mūlārāḍhanā は、空衣派にとって Mūlācāra とともに重要なテキストである。これらに対して Yāpaniya 派の Aparājita の注釈の中には Āyār. をはじめとする聖典が引用され、しかも、この引用されたものには現存聖典とは異なった文節が含まれ、あるものは完全にかけていることが知られている。これはジャイナ教研究の先駆者 E. Leumann が Übersicht über die Āvaśyaka Literatur, aus dem Nachla. hrsg. von W. Schubring. Alt- und Neu-Indischen 4, Hamburg 1934. において指摘した重要な事実である。引用された聖典のうち白衣派最古と目される Ācārāṅga-sutta は、六箇所の引用が認められ、その内四箇所は Muni Jambuvijaya 師などによってすでに現存 Āyār. の当該箇所が同定されている。しかし、その時点では同定されていないものが二箇所あったが、その内の一つが筆者渡辺によってすでに見いだされている。

cf. Kenji Watanabe: Notes on the “Bhāvaṇā” 3rd Cūḷā of the Āyāraṅga-sutta II (= Jain

Studies in Honour of Jozef Deleu, Tokyo 1993.)

III-1. 残るは一箇所である。すなわち、

tathā cōktaṃ Ācārāṅge ... tattha je savva-samaṇṇā-gade thir' aṃga-hattha-pāṇi-pāde savv' imdiya-samaṇṇā-gade tassa ṇaṃ ṇo kappadi egam avi vatthaṃ dhāriṃ, evaṃ parihīṃ, ...

「同様に、Ācārāṅga なかで次のように説かれている。…すべてが完全にそなわっており、身体・腕・手・足が堅固で、すべての感覚が完全にそなわっている（出家修行僧）人にとって、一枚といえども衣を保持することも、着ることもゆるされない。」

「健康な身体の丈夫なジャイナ教の出家修行者は裸形を守るべし」、という趣旨であろう。普通に考えれば Āyār. 六箇所の引用が認められ、その内五箇所はすでに現存 Āyār. のなかに当該箇所が同定されているので、当初、残り一箇所も現存聖典のなかのどこかに存在するのではないかと容易に予想ができた。しかし、予想に反し、探してみたが長い間、どこにも見いだすことができなかったのである。ところが、Āyār. II. 5.1. §1 Vatth' esaṇā の冒頭に次の一節を見つけたことにより、この残り一箇所の引用部分は、現存の白衣派の聖典には存在し得ないことが判明した。

III-2. すなわち、

Āyār. II. 5.1. §1 Vatth' esaṇā の冒頭

je ṇiggaṃthe taruṇe jugavaṃ balavaṃ appāyaṃke thirasamghayaṇe, se egam vatthaṃ dhārejjā, ṇo bitiyaṃ (Ed. by Muni Jambuvijaya)

「青年で、若く、力があり、健康で、(身体が)堅固でよく結合しているニガンタ(男性修行者)は、一枚の衣を持すべきであり、二枚ではない。」

周知のように、ジャイナ教白衣派は出家修行者が白衣を身につけている。これがこのセクトの名称 Śvetāmbara (白衣) の由来にもなっているのである。白衣派の教義によれば、身体の強い若い僧は一衣のみで満足し、そしてより年配の僧は二衣、しかし場合によっては三衣までも許される。このように裸形の状態を含め衣の数は状況により、融通がきく。この点、身体の強健な出家修行は裸形たるべし、と主張し、裸形が解脱に絶対必要であるとする、Digambara (裸形派) の主張と明確に対立する。この両派の「着衣」を巡る主張の対立は、白衣派の聖典の本文にも及び、「着衣」に関連する表現に如実に現れてくる。

III-3. たとえば、Āyār. の第 1 篇 (Suyakkhandha) の現存テキストの acela- (無衣)

なる語を調べると、次のような表現が特徴的である。

je acele parivusie saṃcikkhai ..., se.... Āyār. I. 6.2.2.

je acele parivusie, tassa ṇaṃ bhikkhussa no evaṃ bhavai : Āyār. I. 6.3.1.

je bhikkhū tihim vatthehim parivusie..., tassa ṇaṃ no evaṃ bhavai : Āyār. I. 8.4.1.

je bhikkhū dohim vatthehim parivusie..., tassa ṇaṃ no evaṃ bhavai : Āyār. I. 8.5.1.

je bhikkhū egeṇa vattheṇa parivusie..., tassa ṇaṃ no evaṃ bhavai : Āyār. I. 8.6.1.

je bhikkhū acele parivusie, tassa ṇaṃ evaṃ bhavai..... Āyār. I. 8.7.1 (Ed. by W. Schubing)

ここでは *acela* (無衣) ないし *vatthu* (衣) の語の後に *parivusie* (*pari-√vas*) が結合している。*pari-√vas* には、「一時的に過ごす. 経験する」, という意味があり, ここはそれぞれ, 「無衣 (*acela*) の状態で過ごしている修行者は, 云々」, 「三衣で過ごしている修行者は, 云々」, 「一衣で過ごしている修行者は, 云々」という意味の文である。白衣派は *acela* といえども, *alpa-cela* (わずかな衣) と *Cuṇṇi* などで解釈していることで分かるように, あくまで衣の着用を認めたいのである。それも一衣から三衣までオプションで使い分けるという解釈であろう。

IV. 結語

現存の Āyāraṅga-sutta の第 1 篇の *acela*- (無衣) に関するテキストには, 裸形は修行者の一時的な姿で, オptional であるとする白衣派の主張を忠実に反映しているように思われる。おそらくは, 白衣派の編集によって, かれら白衣派の主張を取り入れたのであろう。このことは現存の白衣派の伝える Āyār. の本文とは異なったマハーヴィーラの主張した裸形 (*acela*) を中心とした, 別の聖典記述の存在を容易に想像させる。事実, 上記 II-1 ~ 2 でみたようにこれら問題となった聖典の箇所はみな裸形か着衣にかかわる部分に関連している。さらに II-3 では非常に分かりやすい証拠として, 白衣派の *Mūla-sutta* の第 2 番目に位置する Utt. の第 2 章の「無衣の試練」*acela-parisaha* を説明する 12 詩部と 13 詩節におかれている本文には, *cela* (着衣) と *acela* (無衣) の観点から, 二つの異なった伝承が, Yāpaniya 派の文献から現実に発見されている。これらの事実, 白衣派の伝持した現存聖典のすがたに新しい考察を加える契機となるように思われる。

〈キーワード〉 Āyāraṅga, ジャイナ教, 聖典成立史

(大正大学非常勤講師)